日本鳥学会

鳥学ニュース No.31

1989年6月10日

飛び立つ

巣立ち1ヶ月前の
アホウドリのヒナ

アホウドリの若鳥
(4～5歳)

アホウドリの成鳥
(10歳以上)

写真：長谷川　博

—— 特 集 ——

飛 び 立 つ (1)

最近，若いひとが，これまでに比べるとたくさん，鳥類研究に専念できる職を得ました。これは，日本鳥学会にとっても非常に喜ばしいことです。

その人たちに，新しい職や就職までの苦労，将来の研究構想，抱負などを語ってもらいました。

長かった浪人の日々

上 田 恵 介

大学を卒業して17年目，学位を取ってから5年目にして，やっとこの4月から立教大学一般教育部自然科（生物学）に就職できました。週5コマの一般生物学（中身は動物社会学）の講義を受け持っています。新任の教師の場合，学生が警戒して（？）余り受講申請がなく，現在は1クラス40人ぐらいでのんびりやっていますが，来年になると200人とか300人とかの講義を大教室でしなくてはならなくなるかも知れません。一般教育部というのは教養部ですので，卒論生も来ないし，院生もいないので気楽な反面，ちょっと寂しい気がします。

講義と教授会は3日に固めてありますから，残りの4日はフィールドワークに使えるわけで，恵まれた研究環境だと言えます。それと7年に一度サバティカルイヤー（1年間の有給研究休暇）を取る権利があります。国公立大学しか知らなかった私は，日本の大学にもこの制度があるということをいままで知りませんでしたが，他の多くの私学にもあるそうです。それから当り前かも知れませんが，研究費があります。文部省の科研費の申請もできます。浪人時代，アルバイトで稼いだお金で本を買い，学会に参加していた私にとってはとてもうれしいことです。

今年1年はのんびりセッカの残りの部分を論文にまとめつつ，自然環境に恵まれた埼玉の自宅付近でフィールド（と材料）探しをするつもりです。もう職についたので，院生・浪人時代と違ってじっくり取り組めるテーマを見つけたいと思っています。島好きの私としては，三宅島や小笠原諸島も近いので，島の鳥でいくつか小さなテーマを設定して仕事をしてみる予定もあります。

「まあ，あかんかったら高校の非常勤と本書いて食っていけるわ」と居直って，“気楽にめげず”に頑張っていたのがよかったと思っています。浪人生活中，私を励まし，勇気づけて下さった多くの会員の方々に，誌面を借りて心からお礼を述べさせていただきます。

南極でアデリーペンギンを

綿 貫 豊

私が運良く（？）国立極地研究所に職を得てすでに1年半になりますが，この研究所の全容をつかめず，いまだにとまどうことがあります。といいますのは，この研究所は文部省の国立大学共同利用機関であると同時に，南極観測事業の中核機関として，観測隊の編成準備や物資調達，輸送など，学生経験しかない私の理解を越えた業務をおこなっているからです。私自身は，1988／89年の30次観測隊夏隊員として観測事業に参加しましたが，研究所職員は平均すると数年に一回程度，日本の観測隊に加わるようです。そうなると，自分自身の研究準備と実施はむろんですが，観測隊の研究部門の3分の2程度を占める大学他の研究機関からの研究者とか研究部門の行動に関連する設営関係者，自衛艦「しらせ」などとの窓口になります。わが国の観測隊の場合，観測部門が隊の半数を占めるため（他国では3分の1程度），研究者の設営作業への参加の機会が多くなり，その調整をおこなう必要もでてきます。

さて，大学等研究機関の研究者が日本の南

極観測に参加するには,(私自身には奇妙に感じられるのですが）いまのところ国家公務員に準じた身分である必要があります。ですから，活動的な大学院生が参加することは本人にとっても，研究観測事業の点からも望ましいことと思いますが，なんらかの形で国家公務員の身分になる必要があります。大学院生は毎年２－３人参加しています。外国の観測隊に参加する場合も極地研を通じてのことが多いようです（身分の問題が少なく大学院生はこちらのほうがチャンスが大きいかもしれません)。いずれにせよ，いままでわが国では少なかった南極での脊椎動物の研究者の活動に少しでもお手伝い出来ればと思っています。

私自身はここしばらくアデリーペンギンの採食生態の研究を進める予定でいます。テーマは，1）ペンギンの両親は雛の成長にともなってコロニーを離れる時間が長くなり，"雛の託児所"ができるが，それには，餌の利用可能性，雛の餌要求量，両親のエネルギー蓄積量の減少，採食努力量がどのように関わっているのか，2）配偶者間での努力量の配分はどうなっているのか，の２つです。ペンギンに装着した連続水深記録計，ラジオトラッキングシステムを使うことによって,(うまく器械が作動してくれれば）採食努力量を測定出来るものと期待しています。

「演習林」で何ができるか……

石　田　　健

運よくこの春から東京大学秩父演習林に助手として勤めることになりました。この職場でなにができるかは，本人のキャラクター次第のようです。演習林というのは，基本的には，林学に関する基礎的・応用的な試験研究をする場所なのですが，林学そのものがより広い視野に立った環境科学の側面を強めている転換期にあり，そういった意味で可能性を秘めた職場だと考えています。ただし，本演習林の研究機関としての現状は，設備や体制の面で不備も多く，それらを改善していくために，研究者としての私自身がねばり強く努力していく必要もあります。(1) 鳥類群集の構造と地形・植生との相関解析，(2) コゲラの個体群動態，(3) アカゲラの飼育実験による行動観察を中心に研究を進め，それに加えて本演習林の管理・経営全般に多面的に関わっていきたいと，欲張った抱負を持っています。

本演習林の事務所と苗畑，私の住む官舎は秩父市にあり，山林は自動車で西へ約１時間行った，雁坂嶺の東に接する急傾斜地にあります。荒川源流の谷は深く，インド・ヒマラヤによく似ていると米人研究者が言ったような山容で，眺望しながら山道を歩いている時に「そう言えばチチブというのはチベットに語感が似ているな」などと，他愛のないことが想い浮かびました。ここで，急な斜面を歩き回る調査を続けるには体力がいります。

都会生まれ，都会育ちの私は，割合に理屈っぽい経緯でこの世界に入り，鳥類研究の楽しさは後からわかってきたものでした。大学受験のときは，樋口広芳さんのいらした研究室だけをめざし，一口にいうと，その時その時の活動を重視してきました。頑固者というのが，私に対する周囲の一致した見方です。転機や行きづまったときには，友人や先輩の言動が大切だったというのも，偽らざる感想です。

次号は大庭照代・川路則友・江崎保男の３氏に書いていただきます。以上の６氏以外の方で，ここ３年以内くらいで新しい職場を得た若い方（40才以下？）は，本号にならって，近況をご紹介下さい。

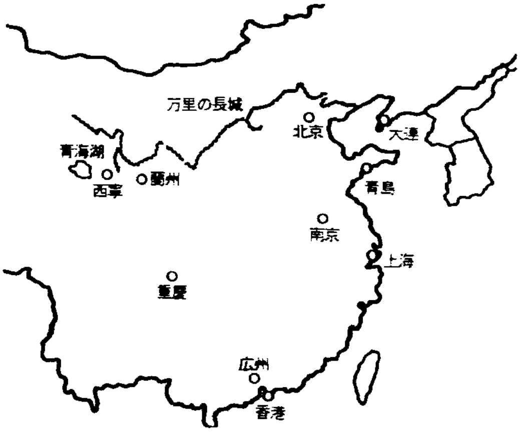
その他，意見・紹介・依頼・発表などの原稿は，ニュース編集部へお送り下さい。

（〒112）東京都文京区大塚５－40－10
日本豊山高校　川内 博 気付
鳥学ニュース編集部

中国西北部および北京の鳥相近況

高田　勝・日比　彰

1988年7月8日から17日にかけて，中国西北部青海省の青海湖周辺，甘粛省の蘭州，およびその近郊の興隆山，そして北京郊外の白竜譚で鳥を観察する機会を得た。これは旅行社企画による探鳥ツアーで，参加人員は10名，いずれも野外観察には経験のある方々で，記録は全て野外観察記録である。中国における鳥の記録が発表される機会は，最近になって目につくようになってきたものの，いまだ残念ながら多いとは言えないため，参考の一助ともなればと，発表した次第である。なお，種の配列は Howard and Moore(1984) によった。



観察リスト

(1988年7月8日～17日)

場所(日) / 種名	北京 (8・9・17) 市内	白龍潭	その他	蘭州 (9・14・15) 市内	興隆山	その他	西寧～日月 (10・13・14) 西寧	石～崖～庄	日月	日月山	青海湖 (10～13) 鳥島	南岸	その他
ｶﾝﾑﾘｶｲﾂﾌﾞﾘ											+		
ｶﾜｳ											+		
ﾊｲｲﾛｶﾞﾝ											+		
ｲﾝﾄﾞｶﾞﾝ											+		
ｱｶﾂｸｼｶﾞﾓ											+		
ﾄﾋﾞ					+			+			+		
ﾋｹﾞﾜｼ											+		
ﾁｭｳﾋ											+		
ｵｵﾉｽﾘ					+						+		
ﾁｮｳｹﾞﾝﾎﾞｳ					+								
ﾜｷｽｼﾞﾊﾔﾌﾞｻ											+		
ｵｸﾞﾛﾂﾞﾙ											+		
ﾂﾊﾞﾒﾁﾄﾞﾘ			+										
ｺﾁﾄﾞﾘ											+		
ｼﾛﾁﾄﾞﾘ											+	+	
ｵｸﾞﾛｼｷﾞ											+		
ﾁｭｳｼｬｸｼｷﾞ											+		
ﾀﾞｲｼｬｸｼｷﾞ											+		
ｱｶｱｼｼｷﾞ											+		
ｱｵｱｼｼｷﾞ											+		
ﾀｶﾌﾞｼｷﾞ											+		
ｲｿｼｷﾞ											+		
ｺｵﾊﾞｼｷﾞ											+		
ﾋﾊﾞﾘｼｷﾞ											+		
ｵｵｽﾞｸﾞﾛｶﾓﾒ											+	+	
ﾁｬｶﾞｼﾗｶﾓﾒ											+	+	
ｱｼﾞｻｼ											+	+	
ﾄﾞﾊﾞﾄ	+	+		+		+			+				
ｺｳﾗｲﾊﾞﾄ						+		+	+		+		
ｷｼﾞﾊﾞﾄ				+	+								
ｼﾗｺﾊﾞﾄ		+											
ｶｯｺｳ		+			+	+							
ﾖｰﾛｯﾊﾟｱﾏﾂﾊﾞﾒ	+	+	+	+		+	+		+				
ｱﾏﾂﾊﾞﾒ					+			+	+		+		
ｶﾜｾﾐ		+											
ﾔﾂｶﾞｼﾗ				+		+					+		
ｱｶｹﾞﾗ			+										
ﾔﾏｹﾞﾗ		+	+										
ｺｳﾃﾝｼ											+		
ｵｵｺｳﾃﾝｼ											+		

場所(日) / 種名	北京 (8・9・17) 市内	白龍潭	その他	蘭州 (9・14・15) 市内	興隆山	その他	西寧～日月 (10・13・14) 西寧	石～崖～庄	日月	日月山	青海湖 (10～13) 鳥島	南岸	その他
ﾋﾒｺｳﾃﾝｼ											+		
ｺﾋﾊﾞﾘ											+		
ｶﾝﾑﾘﾋﾊﾞﾘ						+			+				
ﾀｲﾜﾝﾋﾊﾞﾘ									+		+	+	
ﾊﾏﾋﾊﾞﾘ										+	+	+	+
ｼｮｳﾄﾞｳﾂﾊﾞﾒ											+		
ﾁｬｲﾛﾂﾊﾞﾒ								+					
ﾂﾊﾞﾒ			+	+		+							
ｺｼｱｶﾂﾊﾞﾒ		+	+					+					
ｷｶﾞｼﾗｾｷﾚｲ											+	+	
ｷｾｷﾚｲ						+							
ﾊｸｾｷﾚｲ				+	+	+	+	+				+	
ﾏﾐｼﾞﾛﾀﾋﾊﾞﾘ						+							
ｺﾏﾐｼﾞﾛﾀﾋﾊﾞﾘ									+				
ﾁｮｳｾﾝﾀﾋﾊﾞﾘ											+		
ﾀﾋﾊﾞﾘ									+		+		
ｱｶﾓｽﾞ			+										
ﾀｶｻｺﾞﾓｽﾞ				+									
ｾｱｵﾓｽﾞ				+	+								
ﾑﾅｼﾞﾛｶﾜｶﾞﾗｽ								+					
ﾑﾈｱｶｲﾜﾋﾊﾞﾘ											+		
ｳｽﾔﾏﾋﾊﾞﾘ								+			+		
ｸﾛｼﾞｮｳﾋﾞﾀｷ										+	+	+	+
ﾊｲﾊﾞﾈｼﾞｮｳﾋﾞﾀｷ								+					
ｼﾞｮｳﾋﾞﾀｷ		+			+								
ｼﾛｶﾞｼﾗｼﾞｮｳﾋﾞﾀｷ				+	+								
ｼﾛﾎﾞｳｼｶﾜﾋﾞﾀｷ					+			+	+				
ｵﾘｲﾋﾀｷ					+								
ｻﾊﾞｸﾋﾀｷ											+		
ｾｸﾞﾛｻﾊﾞｸﾋﾀｷ											+		
ｸﾛｳﾀﾄﾞﾘ								+					
ｸﾘｲﾛﾂｸﾞﾐ					+								
ｶﾞﾋﾞﾁｮｳ				+									
ｶｷﾊｶﾞﾋﾞﾁｮｳ					+								
ﾊﾞﾌｲﾛﾑｼｸｲ					+								
ﾑｼﾞｾｯｶ					+								
ﾔﾅｷﾞﾑｼｸｲ					+								
ﾏﾐｼﾞﾛｷﾋﾞﾀｷ		+											
ｼｼﾞｭｳｶﾗ		+		+	+								

場所（日）／種名	北京 (9·9-11) 市内	北京 白龍潭	北京 その他	蘭州 (9·14-15) 市内	蘭州 興隆山	蘭州 その他	西寧～日月 (10·13-14) 西寧	石崖庄	日月	日月山	青海湖 (10～12) 鳥島	西岸	その他
カベバシリ								+			+		
シラガホオジロ											+		
ヒゲホオジロ		+						+	+				
ホオジロ		+											
アオジ				+									
カワラヒワ			+	+		+			+				
キバシヒワ									+		+	+	
スズメ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
イワスズメ											+		
ハジロユキスズメ											+		
チャミミユキスズメ											+		+
ムクドリ			+										
コウライウグイス		+	+										
オウチュウ		+	+										
サンジャク		+											
オナガ			+		+								
カササギ		+	+		+		+	+	+				
ヒメサバクガラス										+	+		+
ベニハシガラス						+		+	+		+		
コクマルガラス						+	+	+	+	+			
ハシボソガラス					+								
ハシブトガラス					+								

場所（日）／種名	北京 (9·9-11) 市内	北京 白龍潭	北京 その他	蘭州 (9·14-15) 市内	蘭州 興隆山	蘭州 その他	西寧～日月 (10·13-14) 西寧	石崖庄	日月	日月山	青海湖 (10～12) 鳥島	西岸	その他
・カイツブリ sp											+		
・Aythya sp											+		
・カモ sp											+		
・ハヤブサ sp				+									
・キジ sp					+								
・ツル sp											+		
・アジサシ sp				+									
・ハト sp				+									
・キツツキ sp			+										
・ヒメコウテンシ sp						+			+		+	+	
・ヒバリ sp			+										
・タヒバリ sp											+		
・モズ sp			+										
・ジョウビタキ sp						+							
・カワビタキ sp								+					
・ダルマエナガ sp					+								
・カラ sp				+									
・ヒワ sp										+			
・マシコ sp											+		
・ユキホオジロ sp									+				
・カラス sp	+					+	+						
・トリ sp						+							

青　海　湖　（富山 稔氏 撮影）

チャガシラカモメ（熊谷 章氏 撮影）

Movement

昭和最後の日本鳥学会大会報告

杉　森　文　夫

1988年度日本鳥学会大会は，千葉県我孫子市民会館で昨年の11月19日から21日にかけて行われ，大会開催中全国各地から参加者が243名，地元の市民など関係者が約150名参加した。懇親会には，121名の会員と我孫子市長をはじめ地元の関係者にも参加いただいた。会員皆様のご協力のおかげで，無事終了することができたことに対し，厚くお礼申し上げる。

今大会開催に当たっては，シンポジウムや小集会などの招待演者として非会員の方々の参加，地元の自然団体や個人，我孫子市，サントリー，大学書林，NHKなどのご援助やご協力をいただいた。特に，「我孫子野鳥を守る会」には，探鳥会の企画及び担当を，また我孫子市役所からは大会会場及び施設の使用などの配慮をいただいた。会員の皆様にご報告すると共に，これらのご協力いただいた皆様方に対し，心よりお礼申し上げる。なお，本大会の開催準備委員会は，吉井正大会準備委員長以下山階鳥類研究所職員がそれぞれ分担協力した。

大会は，一般講演が2会場で41演題，ポスター発表44演題及びシンポジウム6題，また初めての試みとして，小集会の企画を募集したところ，2グループ（鳥害研究会，ツル情報交換会）の申し込みがあった。なお，フイルム発表は会場の施設などの関係で，今回はすべて家庭用ビデオに切り変え，ポスター発表の一部として扱った。なかには，ポスターとビデオを併用する発表もあり，新しい発表スタイルも現れた。

シンポジウムは，今日的課題である「沼の鳥類の現状と保護―特に水質汚濁と関連して―」を企画し，演者として千葉県水質保全研究所の小林節子氏と東邦大学理学部の青山完爾氏などの参加協力を得た。また，小集会はいずれも閉館時間近くまで熱心に行われ，特に鳥害研究会は一般講演なみの参加者があり，関心の高さを示した。

休憩室では，会員間で自由に情報交換が行われ，その壁面には地域の自然やそれに係わる歴史や文化及び湖沼の水質浄化などの地元展示があり，合わせてバード・カービングの実演も行われた。なお，19日は早朝手賀沼探鳥会と懇親会が，20日と21日は山階鳥類研究所の見学会がそれぞれ行われた。

本大会を振り返ると，例年に比べ，①演題数，参加者数ともに過去最大規模であったこと，②会場の施設の利用時間の関係で，一般講演の発表延べ時間や1演題当りの発表時間が短くなったこと③ポスター発表が多く，その発表時間帯を考慮したこと④ 地元展示が多く，地元茶道家元の方々による抹茶の接待などがあったこと，などに特色が出たと言える。改めて今大会を考えると，会員の皆さんには様々な意見があったものと想像され，反省している点も少なくない。

個人的には，シンポジウムや鳥害研究会に参加しただけで，全体的な大会の進行状況は十分に把握できなかった。が，学会に1971年から参加し，当時吉井正庶務幹事の下で山階鳥類研究所で開催された大会や例会（参加者20－40名）の経験しかない私にとって，今回のような200名を越す参加者の大会運営は，この18年間の短い範囲でも，大会が実質的に変革しているように思えた。それは，①発表者や参加者の増加と発表者の若令化及び女性層の増加，②それにともない会場数が毎年のように2会場になったこと，③発表スタイルの多様化，④全国の地元研究者の発表や参加が多く，学会構成メンバーをそのまま反映していること，⑤生態研究以外の発表が少ないこと，⑥大会が各地で開催されだしたこと，⑦企業などからの発表が少ないながら近年出始めたこと，などである。

今大会は，昭和最後の大会になってしまった。今後，平成時代の大会を考えるとき，開催方法や日程などについて再検討することも無意味なことではないように思われた。特に，今後大学以外で地方大会を開催するには，参加者の増加に対する対策，特に会場の確保と発表方法，大会準備委員会や大会前後の人員の確保，参加費などの検討及び地方自治体との協力関係などを考慮されるべきであろう。

今大会は山階鳥類研究所での16年ぶりの大会で，同時に本学会名誉会頭山階芳麿先生の米寿の年の大会となったが，先生は本年1月28日に亡くなられました。会場に出席いただけなかったのは心残りですが，先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

（1989.3.27 記）

我孫子市民会館にて（1988年11月20日）

1989年度 大会のご案内

前回の鳥学ニュースでお知らせしたように，今年度の大会は参加申し込み方法が従来と違っています。以下の文および前号の鳥学ニュースをよくご覧になり，できるだけ多くの方がご参会下さいますようご案内申し上げます。

(1) 研究発表の申し込みは，本日から８月20日まで，講演要旨の受付先着順で56題まで受け付けます（同時到着の場合は遠隔地優先とする）。講演者は会員に限り，１人１件とします（共著として他の研究発表に加わることは，実質的に研究分担者であれば可。また，個人名でない発表はできません）。

講演要旨は，そのまま複写して講演要旨集をつくりますので，同封の原稿用紙に書いて下さい（ワープロを使う場合は１行35字で表題・氏名も含め14行に収めます）。最初の１行は研究発表の表題，次の行は著者名と所属，そのあとが本文です。本文は改行せず，また図や記号を使わないように願います。原稿用紙を書き損じた場合は，62円切手同封で本会事務所に請求して下さい。

(2) 参加の申し込みは，研究発表の申し込みと同様に本日から８月20日までに，参加費2,000円（懇親会出席者は3,000円の懇親会費とも5,000円）を下記振替口座に振り込んでいただきます。その際振替用紙の通信欄に「大会参加」または「大会と懇親会参加」と書き，氏名・住所・電話番号を忘れないように願います。準備委員会側は，これに基づいて参加者名簿を作成します。

振替口座　１９８９年鳥学会大会
東京　６－４１３４６２

８月20日以後はすべて当日参加扱いとし，参加費は2,500円です。懇親会は，原則として当日参加を認めません（人数が確定しないと非常にやりにくいので，あらかじめご承知下さい）。また，いったん納入された参加費・懇親会費は，個人的事情で取り消しの場合は返却致しません。

(3) 大会会場は船橋市東邦大学理学部教室（JR 総武線 津田沼駅よりバス10分）です。日時は1989年９月９日(土)―10日(日)。参加申込者にはプログラムを送付します。旅館の予約は参加者が直接行なって下さい。なお開会・閉会時刻は講演申し込み数により後日調整しますが，56題以内なら９時開場，９時50分開会を予定しています。今回は，ポスター発表がない分，口頭発表が多く，しかも時間的に余裕があり，かつ落ち着いた大会になると思います。

(4) シンポジウムは「托卵鳥と宿主の相互進化」です。他に最近京都大学から学位を授与された細野哲夫氏の特別講演を用意しています。

(5) 大会の世話人が全部決まりました。準備委員長（森岡弘之），受付会場委員（徳武弘子），シンポジウム委員（樋口広芳・中村浩志），講演会場委員（小野宏治），懇親会委員（長谷川博），救護委員（桑原和之），会計委員（成末雅恵）です。

(6) 宿泊施設：船橋グランドホテル(0474-25-1121，JR船橋駅歩２分)，ホテル松翠館（しょうすいかん）(0474-72-1565，東邦大に最も近い)，船橋ホテルシロー（0474-33-1126, JR船橋駅歩７分）など。東京駅から快速で津田沼駅まで30分余り)，秋葉原駅から各停で45分です。東京付近にビジネスホテルがたくさんあります。

（森岡弘之）

大会への参加申し込み方法が従来と少し違っています。ご注意下さい。

補助金の公募

伊藤基金による国際鳥学会議参加補助金の公募：1990年の第20回国際鳥学会議に出席し，研究発表をする会員を対象に，上記の補助金申請者を公募します。(1)資格：今年12月15日に満40才以下の会員で，上記会議で口頭発表，ポスター発表またはシンポジウム講演を行なう者，(2)補助金額：1人25万円，計4人以内，(3)申請締切り日：1989年12月15日（来年初頭に審査し，1月末日までに本人に通知する），(4)申請手続き：申請書とタイプ用紙2枚の研究発表の英文摘要が必要です。詳しくは8月までに出版される会誌37巻4号を参照のこと。なお，国際会議事務局への研究発表要旨送付は1990年3月31日必着，参加費払い込みは1989年9月1月まではNZ＄130.00，以後はNZ＄180.00です。

津戸基金による鳥学シンポジウムの公募：津戸基金による本年度シンポジウムを公募します。とくに申請様式はありませんので，次のことを記載した文書を日本鳥学会・基金運営委員会まで，(1)シンポジウムの表題，(2)責任者名（会員に限る），(3)会場，(4)日時（本年9－12月の間），(5)講演者名と演題。申請締切りは本年6月30日。決定した場合，(3)－(5)の手直しは可能ですが，(1)と(2)は変更できません。また，後日講演要旨と会計報告を提出して頂きます。　　（以上2件　基金運営会）

＜申込み　本会事務局へ＞

【会計幹事から】

◆愛媛県内から4,000円を学会郵便口座に払い込まれ，氏名を書き落とした方がいます。記載住所の会員はいません。心当たりの方はご連絡下さい。

◆会費を余分に納入されている場合には，「会費収支＋〇〇円」と宛名ラベルに印刷していましたが，会費請求と間違われる人があったので，「会費前受分：〇〇円」と印刷するように変更しました。

◆会費の納入額が端数となっている方は，出来るだけ早く解消して下さい。端数の場合は入力作業が倍となります。入金処理の作業軽減にご協力お願いします。

◆会員の方々から払い込まれた会費が学会の口座に納入されると，担当幹事に通知書が送られてきます。そこでパソコンに入力し，そして学会出版物の発送時に新データが宛名ラベルに印刷されます。その間およそ1ケ月かかります。会費を払い込んだのにラベルの表示と異なっている場合で，払い込んでから約1ケ月以内であれば，次回のラベルで再確認して下さい。なお，宛名ラベルに会費納入状況の表示印刷のない方は，その年度の会費が納入済みとなっています。

◆学会への問い合わせや連絡は，電話ではなく，出来るだけ葉書などの文書で行って下さい。

◆次の方々から御寄付をいただきました。感謝申し上げます。通常会計には繰り込まず，鳥学基金（仮称）として積み立てることとなりました。

藤原廣蔵氏　20,000円，谷口一夫氏　4,000円，佐藤　啓氏　1,000円

（福田道雄）

ご注意　先月配布した会誌37巻2号に不良品（落丁，空白）がありましたら，至急本会事務室までご連絡下さい。（お手許の号を一度お調べ下さい。）

訂正　前号（No.30）P.8の沖縄野鳥研究会の代表者のお名前は比嘉邦昭氏です。お詫びいたします。

編集後記

今回の表紙の写真は急きょ提供してもらったものですが，これから鳥の写真・絵なども随時載せていきたいと思っています。ご提供をお待ちしています。次号は8月初めの発行予定。（川内）

鳥学ニュース　No. 31

1989年6月10日　発行　　（会員配布）

発行所　日本鳥学会　（〒160）東京都新宿区百人町3－23－1
国立科学博物館分館内　（振替）東京　1－6599
（電話）03（364）2311

発行人　黒田長久　編集者　川内　博・長谷川博　印刷所　文英社印刷